



榎本 耕一 | Koichi Enomoto

1977年大阪府生まれ。金沢美術工芸大学工芸専攻卒業。同大学院博士前期課程中退。現在は神奈川県にて活動。近年の主な展覧会に2020年「NEW LIFE !!」(TARO NASU、東京)、2019年「六本木クロッシング2019展：つないでみる」(森美術館、東京)、2017年「ストーン」(TARO NASU、東京)、2015年「超能力日本」(HAPS、京都)、2014年「21世紀旗手」(TARO NASU、東京)、「絵画の在りか」(東京オペラシティアートギャラリー、東京)、「GRAPHIC NOVEL」(アラルリオ・ギャラリー、ソウル)など。

金沢アートグミでは13周年記念とし、
画家 榎本耕一の個展を開催致します。

榎本は1977年大阪府に生まれ、金沢美術工芸大学工芸科では鍍金を学びながら、学生時から平行して絵を描いてきました。現在は絵画に制作の軸足を置き、神奈川県を拠点に国内外で精力的に発表活動を行っています。

本展では、5年間で過ごし自身のルーティンの一つとも言える「金沢」、そして美術への入口となった「工芸」をキーワードに、卒業時に制作した金工作品から新作絵画まで、榎本の個人史とその表現の射程を物語る作品群を展示致します。

アートグミ 13 周年記念

榎本 耕一 いまいのしるし

7.8 土 - 7.11 日
10:00 - 18:00

NPO 法人金沢アートグミ 協力 TARO NASU、北國銀行

GUMMI

青草町 88 番地 北國銀行武蔵ヶ辻支店 3 階
gummi.com





例えば工業都市、立山雄峰、魚、とかのあれこれ。一旦離れる。すると自分の体だけ残る。茶色っぽい泥みが目の前に現れる。金沢最大の工業料で鑄んだ僕の場合、鑄金から一旦離れる。銅を炉で溶かす。1000度の灼熱、溶解した銅の液体はセルの眼鏡が高温の奥で鏡のようになり、僕の顔が映る。

技術は今からはるか昔に大陸に現れた。銅鑄・銅鑄も。三層堆遺跡とか飯とか。工業という言葉の中に今ある意味として捨定されたのは明治。西欧列強に恥ずかしくない日出る国であると言った時代。歴史はさまざまに興味深く、僕を惹きつけたい気分にはさせるけれど、子供の頃なもって単純な、息が乱れそうな「俺もやりたいんだらどうなる感」はどこかにないかと考えてみる。熱を作り出すこと。金属を溶かす高揚、思い通りにしようという意欲、それを想像する時にやっただ、という実感がある。

夢想するにあたって業六園の中のヤマトタケルを見物した。「明治記念之標」と言う。石川縣出身戦争戦没者を記す目的で建てられたとのこと。ことを忘れるな、と言うその気持ちに「標(しる)い」漢字に現れている。なんでヤマトタケルが

明治を標するの。古事記を読むとタケルは悲壮な英雄である。元来バケモノじみたところのあるタケルを恐れたらしい彼の父親は、タケルを次々と戦の死地に向かわせる。お父さんは自分を憎んでいるのではないか、と思いつつも、実父の言う通り日本を平かにすべく遠征遠征するタケルは最終的には闘死するのだから、悲壮そのもの。いずれにせよ日本平定のために異民族を討ち滅ぼしたタケルは、同じく異民族(新政府と考えを異にする者たち)を討した西南戦争の戦没者に重ねる物語としては確かに相応しかろう。

この「明治記念之標」は日本最初期の銅像である。1880年、東京ではなく金沢に建てられた。像の造形は、あの高村光雲も制作に加わった皇居前広場の榎木正成像(高村光雲・石川光明・山田鬼翁・後藤貞行=東京美術学校の先生たちが原型制作)のように千両役者という風情ではない。どこかベンテコな、でも立派な気もする。銅像というよりは仏像。大和絵由來と思われる顔面、ずんぐりしている。土台も巨石が積み重ねられ、ものすごい。原型製作者には諸説あり、高岡の鑄造職人が鑄込んだそれは、洋魂利才。現在誰がみても西洋伝来のスタイル、銅像の姿をとっている。制作当時は銅像といえば仏像なのだから、ロダンのように受け取られはせず、カネブツさんと言われ信仰対象になったりもしていたらしい。要するに美術なのか工業なのか



(wave from over there) 2017

のか、曖昧な存在。

したハニベ岩窟院も興味深い。石川県出身、東辛、朝倉塾、流展だった都賀田勇馬氏が第二次で戦禍の犠牲者の夢を慰め世界平和を願うもどに作り始めた。激厚に中央を呼吸した氏が、岩窟院に鎮座せしめた彫刻、仏像群。鬼が人体に盛った料理を食べようとしているといったなどもあり、高村親子・ロダン系統の正統的ないうよりも、石川県小松の珍スポットとして認知が多かる。彫刻的なワザの芽えを感じる彫、もっと砕けたものもある。それは美術館とし品群というよりは、何か、「次へ、次へ!」と高揚と信仰が、起こっては引く波の繰り返しの切な、金属を溶かす喜びのような高揚感とつ、とにかく、今から、ここで、やる、というあ

西欧技術を使って日本の事情を現した明治紀を経て自分の祈念のごときものを造形した都いずれも一本化することができない曖昧な部つも、ポジティブなクリエイティビティーの、らう!」という意志に浸されたまま、「あいまい

のしるし」として目の前に在る。この言葉は、宙吊りを前向きに生きるというニュアンスが入る。この曖昧は強い。

最後に、僕自身。僕は工芸を学んだが絵が好きだったので画家になった。偉大なファイブ・アーティストの薫陶を受けるというより、いわゆる現代工芸の先生方の薫陶を受けた。「芸術」というものに対し、いつも股のようなものを感じてきた。芸術の中に入ろうとすると、なぜかその線が僕と芸術の間にある。サランラップ越しに融る芸術。僕は芯から芸術家なのか、それとも芸術の技術を使って色々と作る工芸的精神の人間なのか、何者でもないのか。精神的な血統を考えるに曖昧だ。

しかし考えてみれば誰しも曖昧だ。曖昧でない何かに向かふんとする存在がいくつもあり、曖昧でない確たるものとされている制度的ないくつかがある。明治記念之際、ハニベ岩窟院という温い曖昧は、そのまま僕自身の曖昧に、また西洋と東洋の合間でいつも曖昧だったこの国にオーバーラップしていく。そして曖昧さは、いつも曖昧でないものの創造の方へと、僕らを意欲させる。運動体として止まるよう指令するのである。